

一月二〇日（金）

章二さんは、勤め人時代のお友達と合同の誕生日会だと三宮へ出かけて行った。新年会も兼ねた毎年の恒例行事。お昼も晩ご飯も考えなくていいのは気楽だけど、自分一人の食事は、それはそれで面倒臭い。

ちょっと暖かい気候に誘われて気ままに出歩いてみたら、何故か、ロイヤルホストでFUDGEに向かって筆を走らせている。もう少し暖かくなればイーゼルと椅子を持って絵を描くのだけでも、それをやるにはまだ寒い。

前に書いた手書きの線画をiPadに取り込み、その上に何色を置くか考えながらああでもない、こうでもない何度か塗っては消してみる。絵具と紙では難しいことも、デジタルなら簡単にできて非常にありがたい。

流石に漫画家さんはいそうにないけど、家の外に出てファミレスで絵を描くと、なんだか仲間入りしているようで楽しくなってきた。軽いランチにドリンクバーを注文し、時間を忘れて色塗りに集中していると、隣の席から視線を感じる。手を止めて、顔を上げた。

「もしかして、小野寺ルミちゃんのお母さん？」

小学校中学年ぐらいの男の子を連れ二人組の女性に、声をかけられた。男の子の隣に座る女性は彼の母親っぽいけど、その向かいに座っている女性がマジマジと私の顔を見つめている。

「ああ、やっぱりルミちゃんのお母さんですよね？」

娘の名前を何故知っているのか。ルミと私とをどうやって結び付けたのか。一人で困惑してフリーズしていると、女性は「一人で興奮しちゃって、すみません」と謝った。

「ルミちゃんの仕事仲間です。何度かZOOMでお見かけしました」

そう言われれば、ビデオ会議しているところに入っちゃって、ルミに何度か怒られたことがあったつけ。私からはハッキリ見えなかったけど、向かいの女性も私に見覚えがあるらしい。

「あら、そうですか。その節はお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそお世話になっております。えーっと、私が武藤で、あつ

ちが高橋です。で、」

武藤と名乗った女性が男の子の方を見ると、「ヒラクです」と自己紹介した。

「啓蒙とか自己啓発の啓で、ヒラク」と、彼の母が教えてくれる。高橋さんは申し訳なきそうに口を開いた。

「ルミちゃんこの間、大丈夫でした？」

「この間、何か？」

「先週、ちよつと飲ませすぎちゃいまして……」

「あら、そうだったんですね」

ルミからは、特に何も聞いていない。高橋さんは不思議そうな表情を浮かべているが、武藤さんは「香織さん、ルミちゃん、今は同居してないのよ」と、こちらを向いて「ですよね？」と確認してくる。「ええ、まあ」と返すと、

「そうですねえ。五年ぐらい前から背景が変わったなあと思つてたら、家が変わつたつて言つてました。えーつと、」

武藤さんは私の顔を見て、言葉に詰まった。

「あ、香帆です」

「香帆さんのお住まいは？」

武藤さんの雰囲気呑まれ、ありのままに答えると「へー、良いところにお住まいですね」と帰ってきた。武藤さんはルミの家の近く、高橋さんは南茨木、天王小学校の近所だとか。

いつの間にか、武藤さんが横に座り、高橋さん達が向かいに座る。iPadの絵を見せたり、啓くんにお絵かきさせてあげたり。夜まで一人寂しく過ごすと思つていたら、娘のおかげで縁ができた。ルミ、ありがとう。

初出 令和三年二月一七日 MAGNET MACROLINKにて公開